様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４３５５

研究課題名（和文）ネット依存の要因とメカニズムに関する実証的研究

研究課題名（英文）The rerated factors and the mechanism of the Internet addiction

研究代表者
金子　一史（Kaneko, Hitoshi）

名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・教授

研究者番号：８０３４５８７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，青年期のインターネット依存と，感情制御，社会的相互作用，親和動機との関連を検討することであった。研究参加者は，701名の高校生であった。ソーシャルメディアおよびインターネットサイトの利用時間，インターネット依存尺度，感情制御困難性尺度，対人交流に関する不安尺度，親和動機尺度のそれぞれについて，回答を求めた。その結果，全体の4.9%が依存群，63.5%が依存疑い群，31.5%が非依存群に分類された。依存群は，感情制御の困難，対人交流に関する社会不安，他者からの拒否不安について，依存疑い群および非依存群に比べて高くなっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
インターネット依存と，感情制御の困難，社会的相互作用，他者からの拒否不安について，日本の高校生を対象に実証的に検討した研究は，我々が知る限りこれまでに存在していない。本研究によって，インターネット依存の背景には，これらの心理的要因が示唆された。本研究の学術的及び社会的な意義として，インターネット依存に陥って苦しんでいる青年への支援にあたっては，インターネットの利用の仕方のみに注目するのではなく，これらの心理的要因を考慮すべき重要な視点として組み入れることを提唱したことがあげられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined features of emotion regulation, social interaction anxiety, and affiliation motives of Japanese adolescents who are and are not addicted to the internet. The participants were 701 Japanese adolescents with mean age of 16.9 (S.D. 0.83). The participants were asked to complete a questionnaire packet which included following scales; The time spend on SNS and internet besides SNS in a day, Internet Addiction Test (Young, 1998), Difficulties in Emotion Regulation Scale (Gratz & Roemer, 2004), Scales on Affiliation Motives (Sugiura, 2000), and Social Interaction Anxiety scale (Mattick & Clarke, 1998). The participants were classified as addicted (4.9%), possibly addicted (63.5%), and non-addicted (31.5%) . Those who were possibly addicted were found to spend more time on social media than did non-addicted participants. Moreover, addicted participants scored higher with respect to difficulties in emotion regulation, social interaction anxiety, and sensitivity to rejection.

研究分野：臨床心理学

キーワード：インターネット依存

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本は，世界でインターネット環境（以下，ネット）が最も整った国のひとつとなった。13 歳から 19 歳の青少年のネット普及率は 97.9%であり（総務省，2014），同年齢集団である 825 万人のほぼ全員がネットを利用している。その一方，架空請求，脅迫，詐欺，名誉毀損，いじめ，ポルノグラフィー，売買春，性被害，オンラインギャンブル，アカウントの乗っ取りなど，ネットを利用した様々な犯罪に青少年が巻き込まれやすい状況となっている。特に，現在の青少年は，幼少期からネット環境が整っている中で育ってきた世代であり，ネット上でのトラブルは日常かつ身近な問題である。

ネット上の問題の中でも，社会の注目を集めている問題のひとつに，ネット依存がある。Young が 1996 年に報告して以降，海外では実証的な研究が盛んに行われてきた。けれども，学術的定義や診断基準については未だ統一されていないという問題がある。アメリカ精神医学会による精神疾患の診断・統計マニュアル（DSM-5; APA, 2013）では，インターネットゲーム障害が，今後の研究のための病態として新たに加えられた。このように，海外では 1990 年代から実証的な研究の蓄積が進んでいるのに対して，国内でネット依存を実証的に取り扱った研究は，申請者らによる報告（山脇・金子，2012）や，樋口（2013），鄭ら（2007,2008）が認められるのみであった。

我々は，社会の関心が高まる以前から，ネット依存の研究を精力的に行ってきた。2012 年には，中学２年生およそ 1800 名を対象とした横断調査を行い，ネット依存と心理的問題との関連を検討した。日本では，女子が男子に比べてネット依存が高いこと，男女ともにネット依存には情緒的問題が関連していること，女子は過活動/不注意，および仲間関係の問題が，男子は行動上の問題が，ネット依存に関連していることを明らかにした。（山脇・金子，2012）。けれども，ネット依存の要因とメカニズムについては，明らかにはなっていない。

２．研究の目的

本研究では,高校生を対象として,未だ明らかになっていないネット依存の要因とメカニズムに関する基礎的研究を遂行し，ネット依存の治療方法の開発などの臨床的応用に展開するための基盤となる研究を行うこととした。ネット依存に関連する要因として，感情制御の問題を取り上げた。通常の生活の中で適切に感情をコントロールできない場合，オンライン上で感情を表するすることが強化され, その結果, ネットに依存しやすいのではないかと推測した。また，社会的相互作用の問題を取り上げた。ネット依存の背景には，対面での直接コミュニケーションに困難を抱えているために, ネットにかえって依存している可能性も考えられたためである。さらに，親和動機を取り上げた。高校生は，他者から拒否されることに敏感となり，他者との結びつきを維持したいという動機から，ソーシャルメディアを仲間内で過剰に用いやすいのではないかと考えた。

３．研究の方法

(1) 研究参加者：研究参加者は， 2 つの高校に所属する 701 名の高校生（男子 354 人，女子 339 人，不明 8 人）であった。研究参加者の平均年齢は，16.9 歳であった。

(2) 測定尺度：研究参加者に，一日のソーシャルメディアと，ソーシャルメディア以外のインターネットサイトの利用時間を尋ねた。インターネット依存傾向を測定するために，Young（1998）が開発したインターネット依存尺度を使用した。インターネット依存尺度は，20 項目から構成されており，70 点以上を依存群，40 点から 69 点を依存の疑い群，39 点以下を非依存群としている。感情制御については，山田・杉江（2013）の，日本語版感情制御困難性尺度を使用した。感情受容困難，行動統制困難，感情制御方略の少なさ，感情自覚困難の，４つの下位因子から構成される。社会的相互作用については，日本語版社会的相互作用不安尺度（金井他，2004）の下位尺度である対人交流に対する不安尺度を使用した。親和動機については，杉浦（2000）の親和動機尺度を使用した。拒否不安と親和傾向の，２つの下位因子から構成される。

(3) 分析手続き：研究参加者は，インターネット依存尺度の得点によって，依存群，依存疑い群，非依存群に分類された。ソーシャルメディアの利用時間，インターネットサイトの利用時間，感情制御困難，対人交流不安，親和動機のそれぞれについて，インターネット依存を要因とした分散分析を行った。

４．研究成果

分析対象となった 672 人のうち，依存群に分類されたのは，全体の 4.9%にあたる，33 人（男子 15 人，女子 18 人）であった。依存疑い群に分類されたのは，全体の 63.5%にあたる 427 人（男子 213 人，女子 209 人）であった。依存群のインターネット依存傾向得点の平均は，79.5 点（SD＝10.2）であった。依存疑い群のインターネット依存傾向得点の平均は，51.4 点（SD＝8.0）であった。非依存群のインターネット依存傾向得点の平均は，32.7 点（SD ＝ 5.1）であった。

統計解析の結果，ソーシャルメディアの利用時間については，依存疑い群が非依存群に比べ

て，有意に高くなっており中程度の効果量を示していた。その他の群間には，有意な差が認められなかった。インターネットサイトの利用時間については，依存群，依存傾向群，非依存群のいずれの群間にも，有意な差は認められなかった。

感情制御困難について，各下位尺度ごとに分析を行った。その結果，感情受容困難に関しては，依存群が依存疑い群と非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。行動統制困難に関しては，依存群が依存疑い群と非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。また，依存傾向群は，非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。同様に，感情制御方略の少なさについても，依存群が依存疑い群と非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。また，依存傾向群は，非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。さらに，感情自覚困難性についても，依存群が依存疑い群と非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。また，依存傾向群は，非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。

対人交流不安について，統計解析を行った結果，依存群が依存疑い群と非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。また，依存傾向群は，非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。

親和動機について，各下位尺度ごとに分析を行った。その結果，拒否不安に関しては，依存群が依存疑い群と非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。また，依存傾向群は，非依存群に比べて，有意に高い得点を示していた。親和動機に関しては，有意な差は認められなかった。

本研究の結果では，およそ５％の高校生が，依存群と分類された。インターネット依存の頻度に関しては，先行研究間でも結果に幅がある。Young，Yue，and Ying (2011)によるこれまで発表された研究を展望した結果においては，青年期でおおよそ 4%，大学生で 13%～18%，一般人口では 6%～15%としている。研究間によって頻度の報告に幅がある理由としては，測定対象や測定方法の違いを考慮する必要がある。また，正確な頻度の測定のためには，自己記入式質問紙のみの手法では適切とはいえない。本研究では，世界的にも広く採用されている Young（1998）のインターネット依存尺度を使用した。けれども，分類に使用した区分点は，原版の数値をそのまま援用しており，日本での妥当性が確認されているわけではない。正確な頻度の測定のためには，インターネット依存尺度の日本での区分点を検討する必要がある。その際には，面接法を実施するなどして，併存妥当性を検討することも求められる。さらには，Young (1998)のインターネット依存尺度は，開発されてから 20 年あまりが経ち，この間，インターネットテクノロジーは，目覚ましい発展を遂げた。そのため，現在のインターネット依存を適切に捉えることが難しいという問題があることにも留意する必要がある。

インターネット依存群は，感情制御困難尺度得点が高くなっていた。この結果は，インターネットに依存している者は，感情調整が不得意になるということが導かれる。ただし，先行研究では，インターネットを，自己の望まない感情を調整する手段として用いているという指摘もある。したがって，インターネットに依存することは，感情制御の困難を導くのかどうかについては，慎重に検討する必要がある。

また，インターネット依存群は，対人交流不安が高くなっていることも示された。この結果は，対人不安が高い人は，対面での直接コミュニケーションを避けるために，よりインターネットに依存しやすい可能性を示唆している。したがって，直接コミュニケーションを取る機会を増やすなどして，対人交流不安を軽減することができるならば，インターネットへの過度な依存も軽減できる可能性が考えられる。その一方，対人交流不安を抱えながらも，直接コミュニケーションのみでは社会参加が限られるような場合には，インターネットを利用することによって，これまで不可能であった活動に参加することが可能となっていることも考えられる。インターネット依存と対人交流不安との関連を検討する際には，実際のインターネットの用い方とあわせて検討することが必要と思われる。

さらに，インターネット依存群は，拒否不安が高くなっていることが示された。この結果は，他者から拒否される事への不安を抱えているために，友人と都の繋がりが切れることを恐れる余り，ますますインターネットへの依存を強めているのではないかと考えることができる。インターネット依存の背景には，このような青年が持っている他者から拒否されることへの不安の高さがあることを考慮する必要があるだろう。他者から拒否される事への不安が存在している場合は，その問題を和らげることを通して，その結果，インターネットへの依存が軽減する可能性があることも，考えられる。

本研究には，一定の限界が存在する。第１に，研究に参加した高校生は，２つの高校から構成されていた。高校の特性が結果に反映されている可能性は高く，本研究の結果をどの程度一般化できるかについては，慎重に検討する必要がある。今後は，複数の地域や学校に所属する青年を対象とすることにより，より偏りの少ないデータを収集することが望ましいと考えられる。

第 2 に，本研究では，自己記入式質問紙を使用した。インターネット依存によって日常生活に支障が出ている場合には，その支障の程度の評価について，自己の認識と家族の認識には隔たりがあることも考えられる。したがって，自己評価のみではなく，家族からの他者評価をつきあわせて検討することができれば，よりインターネット依存の実態に迫ることができるのではないかと思われる。

第 3 に，インターネット依存の理論的考察を，これまで以上に重視する必要がある。近年の

インターネットテクノロジーの発展は凄まじく，これまでの我々のコミュニケーションのあり方を，根本から変えかねない。最近では，仮想現実（Virtual Reality: VR）技術の発達により，ますます現実と非現実の境界が曖昧になってきている。そのような新しい時代では，インターネット依存の実態も変遷していく可能性が十分に考えられる。したがって，インターネット依存については，概念の定義や理論的考察を十分に行う事が，改めて求められている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①濵田祥子・金子一史・小倉正義・岡安孝弘（2017）高校生のインターネットのソーシャルネットワーキングサービス利用とインターネット依存傾向に関する調査報告　明治大学心理社会学研究，査読無，13 巻，91-100.

〔学会発表〕（計２件）

①Hamada Shoko, Kaneko Hitoshi, Ogura Masayoshi, & Okayasu Takahiro. Emotion regulation, affiliation motives, and social interaction anxiety of those with internet addiction among Japanese adolescents. 23rd World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions. 2018. Prague.

②吉川徹　青年期までのネットリテラシー向上の取り組み　第 58 回日本児童青年精神医学会総会　2017 年

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小倉正義

ローマ字氏名：Ogura Masayoshi

所属研究機関名：鳴門教育大学

部局名：大学院学校教育研究科

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：50508520

研究分担者氏名：濵田祥子

ローマ字氏名：Hamada Shoko

所属研究機関名：明治大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：60615037

研究分担者氏名：吉川徹

ローマ字氏名：Yoshikawa Toru

所属研究機関名：愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所

部局名：教育福祉学部

職名：非常勤研究員

研究者番号（8 桁）：70456680

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。